

西光寺だより

第八十二号 平成二九年 六月一日発行

新緑の若葉も少しずつ濃さを増し、日を追うごとに暑さを感じる季節となりました。

六月はさくらんぼの美味しい季節。季節を感じる果物が少なくなってきた中、甘酸っぱいその果実はこの限られた時期にしか出回らない旬を感じられる貴重な果物です。つややかに輝く紅色のその実は、食べるのがもったいないくらい一粒ひとつぶが美しく、まるで宝石のようです。

それもそのはず、さくらんぼの栽培は驚くほど手間のかかる作業だそうです。さくらんぼの生産は山形が全国一位ですが、山形県は夏は暑く梅雨のときも雨が少なく、風も強くないなど、さくらんぼが育つのに適した気候であることから、山形県内で多く栽培されるようになったといわれています。

それでも四月中旬から五月上旬にかけて降る遅霜や、梅雨の雨、また野鳥から守る設備、実を大きくするための間引きなどの作業が必要です。いよいよ収穫が近づくと日陰を作る余計な葉を毎日摘み取り、一個一個色づきを確認して軸ごとそと人の手でもぎ取るのだそうです。そして、パック詰めする際も向きをそろえ粒をそろえてようやく出荷となります。「さくらんぼは最初から最後まで人間の手をかけてやらないとね。」と仰られる生産者さんの声に、日々のご苦労と愛情を感じます。

様々な物が機械化され、これから先、人の手を必要としない仕事ももっと増えてくると言われている昨今ですが、人の心をあたたかくするものは、やはり人の手で大切に育まれたものであると感じます。

ひとつひとつを大切に見ていくこと、ひとつひとつに手間をかけていくこと、そして最後まで向き合っていくこと。

人の手で大切に育てられた可愛らしいさくらんぼの一粒ひとつぶに、見習うべきたくさんさんの愛情を感じるのです。



◆六・七月の行事◆

・六月 十五日(木)～十六日(金)

茨木東組聖跡巡拝旅行 伊勢方面(一泊二日)

◆先月の報告◆

①五月十四日(日)西光寺本堂にて西光寺講総会を行いました。総代会、役員会を経て、総会をむかえる運びとなりました。昨年度の会計報告と今年度の行事予定を報告させていただきました。

今年度は西光寺駐車場入口を、少し広くし、山門に行く山道の両脇をコンクリートで補強させていただきたく、議案させていただいた結果、賛同をいただきましたこと、この場でご報告させていただきます。近隣の皆様にはご迷惑をおかけしますがよろしく願います。

今年度も新たな役員を迎え、皆さんとともに努めていきたいと思っております。どうぞよろしく願います。そして昨年度の役員の方々、本当にありがとうございました。

②四月二十八日に皆様と一緒に西本願寺の第二五代専如門主伝灯奉告法要に参拝しました。先月五月三十一日、十期八〇日間の伝灯奉告法要が円成となり、終了致しました。

第二十五代専如門主が、浄土真宗のみ教え(法灯)を継承されたことを阿弥陀如来と親鸞聖人の御前に奉告され、そのみ教えが広く伝わることを願って、昨年十月一日から始まった『伝灯奉告法要』十期八〇日間の日程で行われ、ご満座(最終)の法要が五月三十一日、つつがなくつとめられ、円成と

なりました。ご満座の法要には、ご門主が「ご消息」(お手紙)を發布され、念仏者の生き方をあらためてお示しにられました。

(本願寺新報より)

昨年(平成二十九年)の十月一日よりお勤めしてまいりました伝灯奉告法要は、本日ご満座をお迎えいたしました。十期八十日間にわたるご法要を厳肅盛大にお勤めすることができましたことは、仏祖のお導きと親鸞聖人のご遺徳、また代々法灯を伝えてこられた歴代宗主のご教化によることは申すまでもなく、日本全国のみならず、全世界に広がる有縁の方々(ご縁者)の報恩謝徳のご懇念のたまものと、まことに有り難く思います。

昨年(平成二十九年)の熊本地震から一年を経過し、甚大な被害をもたらした東日本大震災から六年が過ぎました。改めてお亡くなりになられた方々に哀悼の意を表しますとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。どれほど時間が経過しても心の傷は癒されることなく、深い痛みを感じてお過ごしの方も多くおられるでしょう。なかでも、原子力発電所の事故による放射性物質の拡散によって、今なお故郷に帰ることができず、不自由な生活を余儀なくされている方々が多くおられます。思うままに電力を消費する便利で豊かな生活(暮らし)を追求するあまり、一部の方々(ご縁者)に過酷な現実を強いるという現代社会の矛盾の一つが、露わになったということができません。

自分さえ良ければ他(ほか)はどうかどうなってもよいという私(わたし)たちの心にひそむ自己中心性は、時として表(う)に現れてきます。このような凡愚(ぼんご)の身の私(わたし)たちではあります(が)、ご本願に出(で)会い、阿彌陀如来(あみだ)のお慈悲(あはれ)に撰(えら)め取(と)られて決して捨(す)てられることのない身(み)ともなっています。そして、その大きな力(ちから)に包(か)まれているという安心感(あんしん)は、日々の生活(くらし)を支(た)え、社会(しゃかい)のための活動(かどく)を可能(可能)にする原動力(げんどうりき)となるでしょう。

凡夫(ぼんぷ)の身(み)であることを忘(わ)れた傲慢(ごうまん)な思(おも)いが誤(あや)まっているのは当然(たうぜん)ですが、凡夫(ぼんぷ)だから何(なに)もできないという無気力(むきりき)な姿勢(しせい)も、親鸞(しんらん)聖人(せいじん)のみ教(のみくわう)えとは異なるものです。即(すなは)ち前門主(ぜんもんしゅ)の『親鸞(しんらん)聖人(せいじん)七百五十(ななひゃくごじゅうご)回(かい)大遠忌(だいえんぎ)法要(ほふう)御満座(ごまんざ)を機縁(きえん)として「新たな始まり」を期(す)する消息(そくし)』には、

凡夫(ぼんぷ)の身(み)でなすことは不十分(ふじゅうぶん)不完全(ふぜんぜん)であると自覚(じかく)しつつ、それでも「世(よ)のなか安穩(あんゑん)なれ、仏法(ぶつぽう)ひろまれ」と、精一杯(せいいつぱい)努力(なっりく)させていた(た)きましよう。と記(き)されています。このように教示(きょうし)された生き方(いきかた)が念仏者(ねんぷつしゃ)にふさわしい歩み(あゆみ)であり、親鸞(しんらん)聖人(せいじん)のお心(こころ)にかなったものである(であ)るとい(い)た(た)きたいと思(おも)います。このことは、ご法要(ほふう)初日(しつじつ)に「念仏者(ねんぷつしゃ)の生き方(いきかた)」として詳(くわ)しく述べ(述べ)させていた(た)きました。

今(いま)、宗門(しゅうもん)が十年(じゅうねん)間にわたる「宗門総合振興計画(しゅうもんそうごうしんこうけいけい)」の取(と)り組(ぐ)みを進(すす)めております(が)な(が)、来(き)る二〇二二(にじゅうに)年(ねん)には宗祖(しゅうそ)ご誕生(ごたんじゆ)八百五十(はちひゃくごじゅうご)年(ねん)、そして、その翌年(しよねん)には立教(りてきやう)開宗(かいしゅう)八百年(はちひゃくねん)という記念(きねん)すべき年(ねん)をお迎(むか)えいた(た)します。改めて申(まを)すまでもなく、その慶讃(けいざん)のご法要(ほふう)に向(むか)けたこれ(こ)からの生活(くらし)においても、私(わたし)たち一人(ひとり)ひとり(ひとり)が真実(まじつ)信心(しんじん)をいた(た)だき、お慈悲(あはれ)の有り難(ありがた)さ尊(た)さを人々(ひとびと)に正(ただ)しくわ(わ)かりやす(やす)くお伝(つた)えする(する)ことが基本(きほん)です。そして同(どう)時に、仏(ぶつ)さまのよう(よう)な執(しやく)われのない完全(かんぜん)に清(きよ)らかな行(い)は(は)でき(でき)なくても、それ(それ)ぞれ(ぞれ)の場(ば)で念(ねん)仏者(ぶつしゃ)の生(な)き方(かた)を目(め)指(さ)し、精(せい)一杯(いつぱい)努(な)め(め)させ(させ)て(て)いた(た)だ(だ)く(く)ことが大(だい)切(せつ)です。

み教(みくわう)えに生(な)かされ(され)、み教(みくわう)えをひ(ひ)ろめ(め)、さら(さら)に自他(じた)ともに心(こころ)安(やす)ら(ら)ぐ社会(しゃかい)を現(あらわ)すため(ため)、これ(こ)からも共(とも)々に精進(しやうじん)させ(させ)て(て)いた(た)だ(だ)きま(ま)し(し)よう。

平成二十九年

五月三十一日

龍谷門主 釋專如

二〇一七年

合掌

浄土真宗本願寺派 白毫山 西光寺

大阪府茨木市西河原一七七一

電話 〇七二一六二二一四七九四

FAX 〇七二一六二二一九二九一

<http://www.osaka-saikouji.net/>